「水たち」*ápas* と「信」*śraddhā́-*

——古代インド宗教における世界観——

阪本(後藤)純子

印度学宗教学会　論集　第35号別刷

平成20年

「水たち」*ā́pas* と「信」*śraddhā́-*

—— 古代インド宗教における世界観 ——

阪本(後藤)純子

1. 全ての宗教の中核には「信じる」という主体的精神活動がある。古代インドにおけるヴェーダ祭式宗教(「バラモン教」)も例外ではない。「信」は祭式が成就し，その効力が持続するための不可欠の条件とされる。興味深いことに，「信」は「水たち」*ā́pas*(女性名詞 *áp-*，複数形主格)によって象徴され，時に同置される。また水たちが「誓い，契約」を保証するという観念も古くから見られる。このような考え方は，水たちの「浄化・聖別」作用の場合と同様に，水の属性に関する自然観察に基づくと思われる。水を表す語は後に *udaka-* が主となるが，水が「信」を象徴し「誓い，契約」を保証するという観念は後代にまで生き続ける。

2.「信を置くこと」*śraddhā́-*[1]

「信」という概念の指す内容は時代，地域，文化により幅広い多様性を示す。古インド・アーリヤ語では，動詞 *śrád dhā*「信を置く，信じる，信頼する」(<**k̑réd d ʰeh₁*, cf. ラテン語 *crēdō*「私は信を置く」)が，人，神，ことば，理論などに関して普通に使われる。実体詞 *śraddhā́-*(<**k̑red-dʰh₁-éh₂-*)は「信を置くこと，信じること，信じる思い，信頼」を意味する。「信じる」ことは「それが真実 *satyá-* であると認識する」思考活動であり，概念形成作用の次元に属する(→ 注11)。*satyá-* は「真に実在する，必ず実現する，効力が不変・不滅である」という意味の形容詞であり，また，実体詞として「真実，真理」を意味する[2]。「真実」と「信」とは表裏一体の関係にあり，「真実のことばが

---

1 後藤敏文「*śraddhā́-*，*crēdō* の語義と語形について」(論集 34，2007，578−561)；阪本(後藤)純子「『究極の Agnihotra』を巡る Janaka 王と Yājñavalkya との対話」(論集 34，2007，484−427)，特に 464−462：4.3. *satyá-* と *śraddhā́-* 参照。

2 後藤敏文「サッティヤ *satyá-*(古インドアーリヤ語「実在」)とウースィア *ousía*(古

実現力を持つ」と言う観念が，ヴェーダ以来のインド思想の根底を成す。このような思想背景において「信を置くこと」*śraddhā́-* は祭式が成立するための必須条件とされる。

祭式は，祭主・祭官・神々の参加により，実現力を持つ言葉（*bráhmaṇ-*）と行作（*kárman-*）から構成される。祭式における *śraddhā́-* の意味は幾つかの要素に分析される。(1)祭式の参加者である祭主，祭官，神々の間の相互信頼：神々と人々（祭主，祭官）との間では，前者による超越的な力の行使と後者による讃辞・献供との正当な交換（"give and take"）を信じ合うこと，祭官と祭主との間では[3]，前者による適切な祭式執行と後者による報酬供与（布施）との正当な交換を信じ合うこと。(2)祭式のメカニズムへの信頼：正しく行使された言葉と行作が機能し，祭主の意図が祭式により実現すると信じること。(3)祭主により「(神に）祭られたもの，祭式の効力」*iṣṭá-*，ならびに，「(祭官に）贈られたもの，布施の効力」*pūrtá-* が死後も有効であり不滅であると確信すること（→ 3.2., 注15）。*śraddhā́-* はこのような多面的性格を持ち，文脈により特定の側面が強調される。Köhler 等が重視する「祭主が気前よく贈与・布施しようとする気持ち」[4] は副次的要素であり，*śraddhā́-* の中核的語意「信を置くこと，信じる思い，信頼」は常に保持される。この抽象概念は現実のエネルギーと見なされ，神格化される一方で[5]，祭式・儀礼では具体的な物（水たち）に置き換えられて取り扱われる。

ギリシャ語「実体」）― インドの辿った道と辿らなかった道と ―」『古典学の再構築』ニューズレター第９号（2001）26－40。

3 祭主（特に王族）と祭官は富と権力および祭式・布施の成果を巡って厳しい競争関係にあり，両者の間の信頼は必ずしも安定していなかった。例えば AV XII 5, 5－11；56（Brahmagavī），AB VIII 15, 2－3（Rājasūya, Aindramahābhiṣeka），筆者 "Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-*"（→ 注15）487f.: 3.2., 今西順吉教授還暦記念論集（→ 注15）867 参照。王族階級とバラモン階級との対立に関しては筆者「王族と Agnihotra」印度学仏教学研究，53－2，2005，947－941 参照。

4 "Spendefreudigkeit", "Hingabe"（Hans-Werbin Köhler, Śrad-dhā in der vedischen und altbuddhistischen Literatur [Diss. Göttingen 1948], Wiesbaden 1973）; "die zum Geben treibende Seelendisposition"（Oldenberg, Religion des Veda, 1894, 565, n.3 等）。後藤敏文「*śraddhā́-*, *crēdō* の語義と語形について」（→ 注１），特に 577, n.2, 571, 569, 562 参照。

5 例えば，RV X 151, 1－5（Śraddhā 讃歌），後藤敏文「*śraddhā́* ...」（→ 注１）574f. 参照。

3．「水たち」*ā́pas* と「信を置くこと」*śraddhā́-* との等置[6]

3.1. Praṇīta 儀礼

śraddhā́-「信を置くこと，信じる思い，信頼」が祭式執行に不可欠の前提であることは，祭式開始時の Praṇīta 儀礼により端的に示される。シュラウタ祭の基本形である新月祭・満月祭の開始にあたり，水たちを東へ，すなわち Āhavanīya 祭火（献供火）へ導く儀礼が行われる（*práṇītāḥ*「東へ導かれる（水たち）」)。「水たち」*ā́pas* は「信」*śraddhā́-* と等しく，この儀礼により祭式の成功に不可欠な *śraddhā́-* を捕捉するものとブラーフマナ文献[7] に解説される。特に最古層に属する Māträyaṇī Saṁhitā［MS］では *śraddhā́-* を必要とする理由が２回にわたり詳述される。

A）IV 1,4（新月祭・満月祭の章）では，神々と人々が祭主により「祭られたもの」（*iṣṭá-*：「祭式の効力」→ 3.2.）に信を置くために「信」を捕捉すると説明される；「水たち」は「信」,「祭式」,「神々の固有の[8]（*priyá-*）領域」,「真実」等と等置される：

> MSᵖ IV 1,4:5,18−6,6（Darśapūrṇamāsau, puroḍāśa）　*yó vái śraddhā́m ánālabhya* ⁺*yájate*（Ed. *yajate*）*nā́sya* ⁺*devamanuṣyā́*（Ed. *devamanaṣyā́*）*iṣṭā́ya śrád dadhaty. apáḥ prā́ṇayaty. ā́po vái śraddhā́. śraddhā́m evā́lábhya yajatā. ā́po yajñó. yajñā́ṃ tátvā prácaraty. ā́po devā́nāṃ priyáṃ dhā́ma. devā́nāṁ priyáṃ dhā́ma praṇī́ya prácaraty. ā́po satyáṁ. satyám evā́lábhya yajatā. ā́po rakṣoghnī́. rákṣasām ápahatyā. ā́po vájro. vájraṃ bhrā́tr̥vyāya práharati. stŕ̥tyā. ā́paḥ śraddhā́. śrád dhāsya*[9] *devā́ḥ śrán manuṣyà iṣṭā́ya dadhate. yásyaiváṁ vidúṣa eváṁ vudvā́n apáḥ praṇáyati* 〈*dévīr āpo 'greguvā*〉 *íti yajñám evá prā́ṇayati.*

「信を置くこと」を捕捉せずに祭主として祭るならば，彼によって祭られたもの

6　土井美幸，大阪大学文学部卒業論文「Chāndogya-Upaniṣad における五火二道説」(1996年１月) p.10 n.6 が基本的な部分（：3.1, 3.3.）を既に指摘している。

7　黒ヤジュルヴェーダ散文および「ブラーフマナ」と題する文献群。

8　*priyá-* については，T. Gotō, "'Purūravas und Urvaśī' aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. Ikari)" (Anusantatyai. Fs.Narten, 2000, 79−110), 87f.,「新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える『Purūravas と Urvaśī』物語」(神子上恵生教授頌寿記念論集「インド哲学佛教思想論集」, 2004, 845−868), 860f. 参照。

9　すなわち，*śrád*＋*ha*＋*asya*; Ed. *śráddhāsya*（写本 *śraddhasya*, *śrádasya*, *śradasyā*）。

(*iṣṭá-*) に神々と人間たちは信を置かないのだ。水たちを東へと（Āhavanīya 祭火へと）導く（運ぶ）。水たちが「信を置くこと」なのだ。他ならぬ「信を置くこと」を捕捉してから祭主として祭ることになる。水たちが祭式である。祭式を（織物の縦糸として）張ってから［人は，または，アドヴァリュ祭官は］東に移動する。水たちが神々の固有の（*priyá-* → 注８）領域である。神々の固有の領域を東に導いてから［人は，または，アドヴァリュ祭官は］東に移動する。水たちが真実である。他ならぬ真実を捕捉してから祭主として祭ることになる。水たちが毀損力を打ち砕くものである(→ 5.3.)。毀損力を打ち砕くために[である]。水たちが棍棒(*vájra-*)である。棍棒を競争相手たちに対して打ちつける。打ちのめすために［である]。水たちが「信を置くこと」である。「信」を，つまり（*ha*），神々が，「信」を人間たちが，彼によって祭られたもの（*iṣṭá-*）に置く。このように知っている［祭主］の水たちを，このように知っている［祭官］が東へと導くならば ―「天に属する（女神である）水たちよ，先頭において行く者たちよ，（先頭において導く者たちよ，この者の祭式の先頭において，東へ行け）」[10] と［唱えつつ］― ，他ならぬ祭式を東へと導くことになる。

B）I 4,10（祭主の章）では，「信」を捕捉せずに祭式を行えば祭主は「より悪い状態」になること，「水たち」＝「信」はことば（祭詞）ではなく思考によってのみ捉えられることが説かれる。ほぼ同じ文が Kāṭhaka-Saṁhitā [KS]（アクセント表記を欠く）にも現れる：

MSᵖ I 4,10:59,2（Yajamāna）～ KSᵖ XXXII 7:26,15　*yó vái śraddhā́m ánālabhya yájate pā́pīyān bhavaty. ā́po vái śraddhā́. ná vā́cā gṛhyante ná yájuṣā́-. áti vā́ etā́ vā́cam nédanti áti vártam. mánas tú nā́tinedanti. yárhy apó gṛhṇīyā́d*（KS *gṛhīṣyan syād*）*imā́ṃ tárhi mā́nasā dhyāyet.*

「信を置くこと（*śraddhā́-*)」を捕捉せずに祭主として祭るならば，［その者は］より悪くなるのだ。水たちが「信を置くこと」なのだ。[水たちは] ことばによってつかまえられない，［つまり］祭詞によっては。この女性たちはことばを越えて溢れる，堤を越えて［溢れる]。しかし，思考を越えては溢れない。水たちをつかむ（KS：つかもうとする）場合には［いつでも］これ（「信を置くこと」*śraddhā́-*）を思考によって念ずべきである。

10　mantra：MS I 1,4：2,12f. *dévīr āpo 'greguvo 'greṇīyó 'gre 'syá yajñásya préta* ～ KS I 11:5,19。Cf. MānŚrSū I 2,1,12；5,21；8,4,3。

Taittirīya-Saṁhitā［TS］願望祭における祭主の章は，MS^{p} の A）を継承しつつ，B）（〜KS^{p}）における「水たち」を「思考」*mánas-* によりつかまえる議論を引用する[11]。Taittirīya-Brāhmaṇa［TB］III 2,4,1[12] は MS^{p} の A）を簡略化し，「祭主が信を捕捉することにより，神々・人々が彼により祭られたものに信を置く」という議論を省く。

他方，同儀礼に際し祭主が唱える[13] マントラ（TB^{m} III 7,4）では「水たち」は「信」を補捉するための手段・道具とされる：

yā́ḥ purástāt prasrávanti | upáriṣṭāt sarvátaś ca yā́ḥ |
tā́bhī raṣmípavitrābhiḥ | śraddhā́ṃ yajñám ā́rabhe ||

前方へと流れ進む，上方へと，また，すべての方向へと［流れ進む］，太陽光線を清め具とする[14] 彼女たち（水たち）により，「信を置くこと」を，祭式を［私は］

---

11 TS^{p} I 6,8,1－2（Aiṣṭikayajamānavidhi, Yajñāyudhasambhr̥ti）*yó vái śraddhā́m ánārabhya yájate nā́syeiṣṭā́ya śrád dadhate. 'páḥ prá ṇayati. śraddhā́ vā́ ā́paḥ. śraddhā́m evā́rábhya yajñéna yajata. ubháye 'sya devamanuṣyā́ iṣṭā́ya śrád dadhate.* ***tád āhur.*** *áti vā́ etā́ vártaṃ nedanti, áti vā́cam. máno vā́vā́itā́ nā́tinedantī́ti. mánasā prá ṇayatī-.* ***iyáṃ vái mánaḥ.*** *//1// anáyaiváināḥ prá ṇayati. áskannahavir bhavati yá evéṃ véda.*「信を置くこと（*śraddhā́-*）」を捕捉せずに祭主として祭るならば，彼により祭られたもの（*iṣṭá-*）に［神々・人々は］信を置かないのだ。水たちを東（Āhavanīya 祭火）へと導く。水達が「信を置くこと」なのだ。他ならぬ「信を置くこと」を捕捉してから祭式により祭主として祭ることになる。神々と人々の両方が彼により祭られたもの（*iṣṭá-*）に信を置く。**それについて［人々は］言っている**：「この女性たち（水たち）は堤を超えて流れるのだ，言葉を超えて。実に思考（*mánas-*）をこの女性たちが超えて流れることは無いのだ。思考により［水たちを］東に導く。**思考がこれ（信を置くこと：*śraddhā́-*）なのだ**（→ 2.）。他ならぬこれ（*śraddhā́-*）により当の女性たち（水たち）を東に導くことになる。このように知っている者（祭主）は，こぼれ出ない供物を持つ者となる。

12 *apáḥ prā́ṇayaty. śraddhā́ vā́ ā́paḥ. śraddhā́m evā́rábhya praṇī́ya prácarati. apáḥ prā́ṇayaty. yajñó vā́ ā́páḥ ... ā́po vái sárvā devátāḥ. devátā evā́rabhya praṇī́ya prácarati.*「水たちを東へと（Āhavanīya 祭火へと）導く（運ぶ）。水たちが「信を置くこと」なのだ。他ならぬ「信を置くこと」を捕捉してから，［水たちを］東に導いてから，［人は，または，Adhuvaryu 祭官は］東に移動することになる。水たちを東へと導く。水たちが祭式である。… 水たちがすべての神格たちなのだ。他ならぬ神格たちを捕捉してから，東に導いてから，［人は，または，Adhuvaryu 祭官は］東に移動することになる。

13 ĀpŚS IV 4,4, BaudhŚS II 1:34,3f. 参照。

14 水の粒子たちは太陽光線を経路として宇宙を循環する（→ 4.2.）。

補捉する。

Yajurveda 散文における「水たち」と「信」との等置には論理の飛躍があり解りにくいが，マントラにおける「水たちにより信を補捉する」という論理は自然である。後述（→ 4.3.1.）のように，「水たち」は永遠に宇宙を循環しながらもその本質を変えず不滅であることから，「真実」を象徴する。先に（→ 2.）述べたように，「信じること」は「真実であると認識すること」に他ならず，「信」と「真実」とは表裏一体の関係にある。従って，「信」は「真実」によってのみ捉えることができる。「真実である水たちにより信を捉える」という考え方が先にあり，そこから「水たちが信である」という等置が導かれたと推測される。

3.2. Keśin Dārbhya の教え

祭主により「祭られたもの」*iṣṭá-*（*yaj* の過去分詞）は祭火により天に運ばれ（→ 4.2.），「祭られた祭式の効力」として蓄積され，死後，天界に上昇した祭主と合体し，天界での彼の生存基盤となる。祭主により祭官に「与えられたもの」*pūrtá-*（*par^{i}*, *pṛṇā́-^{ii}* の過去分詞），すなわち「布施の効力」も同様である（→ 4.2.）。そのひとの「祭式と布施の効力」*iṣṭā-pūrtá-* が尽きると天界において再死し，地上へ生まれ変わる。この思想は Ṛgveda［RV］末期からブラーフマナにかけて発達し，ウパニッシャド以降の「業と輪廻」理論の基盤となる[15]。天界における「再死」(*punaru-mṛtyú-*）を免れて「不死」(*amṛ́ta-*）を得ることがヴェーダ祭式の究極の目的となり，「祭式と布施の効力」の不滅が求められた。そのためには，シュラウタ祭火を設置し，長期間にわたり規則的に多数の祭式を挙行し，多くの祭官報酬を与えることが必要とされた。例えばブラーフマナ文献最古層に属する MS^{p} I 8,6:123,18ff.（Agnihotra）には，次のように述べられる：

yó vái bahú dadivā́n bahv ījānò 'gním utsādáyate 'kṣit. tád vái tásya tád. ījānā́ vái sukṛ́to

15 *iṣṭā-pūrtá-*「祭式と布施の効力」の観念は，BĀU（Yājñavalkya の教説）や仏教などにおける *kárman-*「業」，ミーマーンサー学派の *apūrva-* に繋がる。筆者「*iṣṭā-pūrtá-*『祭式と布施の効力』と来世」『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』(1996) 882－862；“Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion”, *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik,* 2000, 475－490, 特に 476－478 参照。

'múṃ lokáṃ nakṣanti. té vā́ eté yán nákṣatrāṇi. yád āhúr, jyótir ávāpādi tā́rakā́vāpādī́ti, té vā́ eté 'vapadyanta. āptvā́ sthité tá idáṁ yathālokáṁ sacante yadā́mútaḥ pracyávanté. 'tha yó bahú dadivā́n bahv ìjānò 'gnihotráṃ juhóti darśapūrṇamāsáu yájate cāturmāsyáir yájate bahū́ni satrā́ṇy upáiti, tásya vā́ etád akṣayyám áparimitaṃ.

もし［祭火設置者が］多く［の布施］を与え多く［の祭式］を祭主として祭った後，自身の祭火を［自らの死により］取り除く（片づける）ならば，［彼の祭式と布施の効力（*iṣṭāpūrtá-*）は彼の死により］消滅しないのだ。そのようなものとしてそれ（*iṣṭāpūrtá-*）は彼に帰属するのだ。祭主として祭った善行者たちはあの世界に到達するのだ。星たちであるならば，それらはこの者たちなのだ。［人々が］「光が落ちたぞ，星が落ちたぞ」と言う時，そのようなもの（星たち）としてこの者たちが落ちるのだ。［あの世に］到達し滞在した後，あの世から去る時は常に（または：去るや否や），彼らはそれぞれ［自ら得た］世界に応じてこの世に従う。他方，もし多く［の布施］を与え多く［の祭式］を祭主として祭り，Agnihotra を献じ，新月満月祭を祭り，季節祭により祭り，多くの Sattra（バラモンのみに許される特殊なソーマ祭）を行うならば，彼には，これ（祭式と布施の効力）が不滅，無限のものとして帰属するのだ。

一度しか祭式を行わなかった祭火設置者は，死後に天界に上昇しても，自らの「祭式の効力」がすぐに尽き，「再死」して天界から転落することを恐れる。そのような祖霊が黄金の鳥の姿を取り，子孫である祭官学者 Keśin Dārbhya に「一度だけ祭られた祭式の効力の不滅」を尋ねるエピソードがブラーフマナに残る。たとえ一度だけでも「信を置きつつ祭るならば」その祭式の効力は不滅であり，その不滅は「諸世界と体内の水たちの不滅」により保証されることを Keśin Dārbhya は教える：

Kauṣītaki-Brāhmaṇa VII 4（Ed. Sarma VII 6）［ソーマ祭の潔斎 Dīkṣā］ *atha khalu śraddhaiva sakṛdiṣṭasyākṣitiḥ. sa yaḥ śraddadhāno yajate, tasyeṣṭaṃ na kṣīyata. āpo 'kṣitir, yā imā eṣu lokeṣu, yāś cemā adhyātmaṃ. sa yo mayy akṣitir iti vidvān yajate, tasyeṣṭaṃ na kṣīyata. etām u haiva tat keśī dārbhyo hiraṇmayāya śakunāya sakṛdiṣṭasyākṣṭim provāca.*

次に，周知の如く，他ならぬ「信を置くこと」が，一度だけ祭られた［祭式の効力］（*iṣṭá-*）の不滅である。もし人が［祭式の効力に］信を置きつつ祭主として祭るならば，彼によって祭られた［祭式の効力］は滅しない。不滅とは水達である，これら諸世界に存在するこれら［の水達］と自身に関わる（体内に存在する）これら［の

水達］とであるところの。そこで，不滅が私に（の中に）存在すると知っていて祭主として祭るならば，その人によって祭られた［祭式の効力］は滅しない。他ならぬこの［不滅］を，また，つまり，その時，Keśin Dārbhya は黄金から成る鳥に，一度だけ祭られた［祭式の効力］の不滅として公言した。

3.3. 五火二道説

古代インドにおける「輪廻」理論の一展開形として有名な「五火二道説」は，前半の「五火説」で「人がどのように発生するか」という主題を，後半の「二道説」で「人が死後どこへ行くのか」という主題を扱う。ウパニシャッドにはほぼ同一の２伝承があるが（Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad［BĀU］VI 2,1−16, Chāndogya-Upaniṣad［ChU］V 3,1−10,1），いずれも「信を置くこと，信じる思い，信頼」*śraddhā́-* が「水たち」*ā́pas* であることを前提とする。Pañcāla 王 Pravāhaṇa Jaivali が若いバラモン学者 Śvetaketu に５つの質問を発することから始まる：

(1)「生き物たちはこの地上から去ってどこへ行くのか」

(2)「どのようにして彼らは再び［地上へ］戻ってくるのか」

(3)「神々の通る道（*panthā- devayāna-*）と，祖霊たちが通る道（*panthā- pitr̥yāna-*）と，二つの道に分かれて進むことを知っているか」[16]

16　人が死後たどる道に２種あることは，既に RV X 88,15 に述べられる：*d**u**vé srutī́ aśr̥ṇavam pitr̥̄ṇā́m* ¦ *ahám devā́nām utá mártyiyānām* | *tā́bhyām idáṃ víśvam éjat sám eti* ¦ *yád antarā́ pitáram mātáraṃ ca*‖「父祖たちの二つの道筋を私は聞いた，［すなわち］神々の［道筋］と死すべき者たちの［道筋］とを。それら二つを通って，父（天）と母（地）との間にある，このあらゆる動くものは共に進む」。*pánthā- devayā́na-*（sg./pl.）は，RV では「神々が祭式に来て帰る道」ないし「Agni が供物を神々に運ぶ道」を意味する。AV XVIII 4,62−64では，*pánthā- pitr̥yā́na-* は「祖霊が毎月の祖霊祭に来て帰る道」を指す。*devayā́na-*「神々が往来する（道・世界）」と *pitr̥yā́na-*「祖霊たちが往来する（道・世界）」（sg./pl.）に関しては更に次の例を参照：AV V 18,13（*pitr̥yā́ṇa- loká-*「祖霊たちが行き来する世界」），VI 117,3（*devayā́nāḥ pitr̥yā́ṇā́ś ca lokā́ḥ*），XII 2,10（*pathíbhiḥ pitr̥yā́naiḥ ... devayā́naiḥ*），XV 12,5（*prá pitr̥yā́ṇaṃ pánthāṃ jānāti prá devayānam*）〜9（否定文），XVIII 4,62（*gambhīráiḥ pathíbhiḥ pitr̥yā́naiḥ*），MS[p] IV 2,1：22,14ff.（「神々の視覚である太陽」::「祖霊たちの視覚である月」＝ *devayā́na- pánthā-* :: *pitr̥yā́na- pánthā-*），ŚB-M I 9,3,2（祭火から太陽へ通ずる道 *pánthā-* が通る人の資格次第で *devayā́na-* にも *pitr̥yā́na-* にもなる，［注15に挙げた筆者 “Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* ...” 478,『今西順吉教授還暦記念論集』876f. 参照］）。

(4)「どのようにして，あの世界は一杯にならないのか」

(5)「どのようにして，5番目の献供において，水たちが人の言葉を持つ者となるのか（*yathā pañcamyām āhutāv āpaḥ puruṣavacaso bhavanti*）」。

この質問に答えられなかったŚvetaketuは，大学者である父Āruṇiに尋ねるが，Āruṇiも答えられず，Jaivali王のもとへ行き，王族だけに知られていた知識「五火二道説」を授かる。その前半の「五火説」を要約すると：

(1) かの世界は祭火（*agni-*）なのだ。太陽がその焚木だ。光線たちが煙だ。昼が炎だ。月（*candramās-*）が熾たちだ。（……略……）この祭火の中に神々は「信じる思い」*śraddhā-* を献供する。その献供から（植物の）王ソーマ（*soma- rājan-*）[17] が発生する。

(2) Parjanya（雨の神）は祭火なのだ。（……）この祭火に神々は（植物の）王ソーマを献供する。その献供から雨が発生する。

(3) 大地は祭火なのだ。（……）この祭火に神々は雨を献供する。その献供から食物が発生する。

(4) 男は祭火なのだ。（……）この祭火に神々は食物を献供する。その献供から精液が発生する。

(5) 若い女は祭火なのだ。（……）この祭火に神々は精液を献供する。その献供から胎児が発生する。これが，5番目の献供において水たちが人の言葉を持つ者となる，ということである。

「神々が信じる思い *śraddhā-* を献供する」ことを起点に，5段階の祭火への献供を経て，最後に胎児が発生する。これが「水たちが人のことばを持つ者となる」ことを意味する。しかし，神々の献供のどこにも「水たち」は言及されておらず，「信じる思い」*śraddhā-* が「水たち」*āpas* であることが暗黙の前提とされている。

Jaiminīya-Brāhmaṇa［JB］I 45（Agnihotra）には五火説のより古い形が見られる：

---

17 *sóma-* は覚醒・興奮作用を持つ植物（麻黄 ephedra と推測される）の絞り汁で，祭式の供物であり，祭式の参加者によって喫飲され，神々の「不死をもたらす飲み物（ambrosia）」*amṛ́ta-* とされる。王ソーマという呼称は当該植物の絞り汁のみならず，天空の月に対しても用いられるが（→ 4.2.，注 28－35），当該箇所では月は *candramās-* と呼ばれ，植物の絞り汁であるソーマとは区別されている。

eṣa vā agnir vaiśvānaro ya eṣa tapati | ... *tasminn etasminn agnau vaiśvānare 'harahar devā amr̥tam apo juhvati* | *tasyā āhuter hutāyai somo rājā saṃbhavati* ‖ ... *striyo vā agnir vaiśvānaraḥ* | ... *tasminn etasminn agnau vaiśvānare 'harahar devā reto juhvati* | *tasyā āhuter hutāyai puruṣas saṃbhavati* ‖

この周知の熱しているもの（太陽），これが全ての人々に属する火（「普遍火」*agni-vaiśvānara-*）なのだ。… そのようなこの普遍火に，日々，神々が不死の飲物（*amr̥tam* acc. sg. n.）である水たちを（*apas* acc. pl. f.）献供する。その供物が献供されると，それから（植物の）王ソーマが発生する。… 女が普遍火なのだ。… そのようなこの普遍火に，日々，神々は精液を献供する。その供物が献供されると，そこから人が発生する。

JBは最初の供物を「水たち」と明言している。ウパニシャッドにおいて「水たち」が「信」*śraddhā́-* に置き換えられていることは，「水たち」*ā́pas* と「信」*śraddhā́-* との等置が既に確立していたこと示す。

— JBの五火説はJanaka王の五火説（Śathapatha-Brāhmaṇa［ŚB］, Mādhyandina XI 6, 2, Kāṇva XIII 6,2）を基に改作されたと推測される[18]。Janaka説では人が地上で祭火に献ずるAgnihotraの供物（熱された牛乳）が起点となり，中空，天，地，男，女という諸祭火を経て男子が産まれる。いずれのヴァージョンでも五火説は，水（供物）が宇宙を循環し生命を発生させるという思想（→ 4.2.）を基盤とする。

—「二道説」では人が死後にたどる二つの道（*devayāna-* と *pitr̥yāna-*）として，水・光熱・生命エネルギーの循環に関する太陽系統の理論と月系統の理論と（→ 4.2.）が融合・発展している。

4.「水たち」*ā́pas*

水たちが「信を置くこと」と同一化される基盤には，自然観察による「水の属性」の知識が想定される。特に「水の循環」に関する理論が大きな役割を果たしたと思われる。

---

18 筆者 “Zur Entstehung der Fünf- Feuer-Lehre des Königs Janaka”, Akten der 27. Deutschen Orientalistentages, 2001, 157－167 ; “*katháṃ-katham agnihotráṃ juhutha* — Janakas Trickfrage in ŚB XI 6,2,1”, Anusantatyai. Fs. Narten, 2000, 231－252 参照。

4.1. 古インドアーリヤ語には「水」を表す実体詞が複数存在する。その中の一つは，中性名詞 *udán*- (/**udr*-)（主として RV）とその拡大形 *udaká*-（RV 以降も一般的に用いられ続ける）で，「物質としての水」を意味する。この語は接尾辞に *n* と *r* の交替をもつ印欧祖語に遡る物質名詞で（nom. **u̯ód-r̥*，gen. **u̯éd-n̥-s*），英語 *water*，ギリシャ語 *húdōr* 等と同起源である[19]。中性名詞 *vā́r*-（RV＋，後には *vāri*-）も物質的な「水」の意味で用いられる（他の印欧語には「雨水」の意味も見られる）[20]。

他の代表的語彙は女性名詞 *áp*-（印欧祖語 **h₂ép*-）で，通常は複数形（nom. *ā́pas*）で「生きている水たち」，すなわち「精神を備えて活動する生命体の集合」としての水を意味する。この「生きている水達」は *devī́*-「天に属する」神的存在の女性集団とされ，ヴェーダ祭式において重要な役割を果たす。

物質としての「水」（中性単数 *udán*-, *udaká*-, *vā́r*-）と神格としての「水たち」（*ā́pas*）とはヴェーダ文献では明確に区別されるが，時代とともに両概念の境界が曖昧になり，*áp*- の語が廃れるとともに[21]，「水」は主として *udaká*- で表されるようになる。「天に属する（神的）女性」としての水の性格は *apsarás*- に受け継がれた可能性がある（→ 注26 Urvaśī）.

4.2. 水の循環

古代インドにおいて「水の循環」は，「太陽・火の光熱力の循環」および「生命主体（*ásu*-，*ā́tman*- 等の語で表現）の循環」と結合し，壮大な「水，光熱，生命エネルギーの循環」理論[22]を形成している。

---

19 Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen, I 215 s.v.（1988）参照。

20 Mayrhofer, 同書 II 544f. s.v.（1995）参照。

21 Pāli 語では，女性名詞複数形 *ā́pas* に対応する中性名詞 *āpo*（nom. sg.）および，それから二次的に派生した男性名詞 *āpa*-「水」(sg./pl.) が用いられ，複合語前肢には *āpo*-，*āpa*- の両形が現れる；*āpo-kāya*-「水の集合体」は 7 元素（地・水・光熱・風・楽・苦・生命）の一つとして「水という元素」を意味する，A Critical Pāli Dictionary II 85f., 105 参照。Ardhamāgadhī では男性名詞 *āu*-「水」(sg./pl.) として活用する（Pischel § 355）。Jaina 教では *āu-kāya*-（更に *āu-kāyaya*-，*āu-kāiya*-）の語義は「生きている水たちの集合体」から「水に棲む生物の集合体」へと転換する（渡辺研二氏と河崎豊氏の教示による）。

22 1994年に，日本印度学仏教学会（「輪廻転生における生命エネルギーの摂取・流入の理論について」）と，インド思想史学会（「五火二道説成立の背景」）において，

水は天から雨として大地に降り，地下に潜り泉として湧き，河川として流れ，湖沼を作り，海に注ぎ，或いは生物の体内に入り排出され，再び蒸気となって中空から天に上昇し，永遠に宇宙（マクロコスモスとミクロコスモス）を循環する。基本的には，この循環の起点は太陽であり，太陽が水を吸収し放出すると理解された。太陽から大地に降り注がれた水は太陽ないし火に熱されて，中空では光り輝く熱い水の粒子（*márīci-*[23]，複数形）となり太陽光線（*raśmí-*[24]，複数形）を経路として上昇し（→ 3.1.末：TB^{m} III 7,4），太陽に吸収される。同様に，祭火に注がれた供物（牛乳，溶かしバター，ソーマの絞り汁などの液体を代表とする）も祭火の道を通り太陽に至る。この太陽と祭火を軸とするエネルギーの循環理論はインド古代思想の根幹にあり[25]，前述の「五火説」（→ 3.3.）の基盤をなす。

水はまた，植物に吸収され，動物に飲まれ，すべての生物の内部を流れ，排出され，外界と生命体とを繋ぎ，生命力を与える。活力，滋養の供給から，無病，長寿をもたらす薬（*bheṣajá-*），「不死をもたらす飲物（ambrosia）」*amṛ̥ta-* と見なされる（→ 6.2., 6.3.）。生命の根源として「母たち」と呼ばれ（*ambáyaḥ* → 6.2., *mātáraḥ* → 6.1., 6.3.），また「水から（*apás*）男児が生まれる」[26] とい

資料とともに口頭発表；部分的要約については，“Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* ...”（→ 注15）476ff. 参照；詳細は別稿を期す。

23 Weber, Indische Studien IX, 1865, 9 n.1 参照。漢訳仏典の「摩利支天」に受け継がれる。

24 通常，複数形；原義は「革綱」で，太陽（Indra と等置される）が地上の万物を繋ぎ操る「手綱」から「太陽光線」の意味へと発展したと思われる。太陽光線は，神々，Marut 神群，Viśve Devāḥ（「一切神」，しばしば祖霊たちと等置される特定の神群，筆者「究極の Agnihotra ...」[→ 注 1]，478 注20 参照），あるいは「(死亡した) 善行者（*sukṛ̥t-*）たち」と見なされる（→ 注25)。

25 例えば，RV I 164, 7.47.51, AV VII 107, 1, TS^{p} III 3,4,1, VS XXXVIII 6（ŚB XIV 2,1,21），JB II 333, Mahānārāyaṇa-U 533f.（Taittirīya-Āraṇyaka X 63），MaitrU VI 37, Mahābhārata XII 255, 10f., Bhagavad-Gītā IX 19, Manu-Smṛti III 76, IX 305, Yājñavalkya-Smṛti III 71, 121−124. この循環理論から，太陽が太陽光線を通じて万物に生命を与え奪うという説が発展する，例えば ŚB-M II 3,3,7f., X 5,1,4, X 5,2,3. 13, JB III 359。太陽光線である神格たち（→ 注24）は光り輝く熱い水の粒子たち（*márīci-*）を飲む，例えば MS^{p} IV 5,5:71,2f.（MS^{m} I 3,4:31,10），TS^{p} VI 4,5,5（TS^{m} I 4,2,1[f]），VS VII 3−6, ŚB IV 1, 1,24f.

26 RV X 95,10 *vidyún ná yā́ pátantī dávidyod* ¦ *bhárantī me ápiyā kā́miyāni* | *jániṣṭo apó náriyaḥ sújātaḥ* ¦ *pra -órvaśī tirata dīrghám ā́yuḥ* ‖「私に望みの物たちを運ぶとき，稲

う表現も見られる。この理解から，五火説（→ 3.3.）における「水から胎児が発生」ないし「供物から男子が誕生」という理論が展開する。

他方，月の朔望と運行からは別の循環理論が成立する。月は満ち欠けしつつ，毎夜，異なる星・星座（月宿 *nákṣatra-*；個々の *nákṣatra-* は女性神格）に近づく；朔には太陽に重なり夜空から消えるが，再び新月として現れる[27]。この現象は，男性神である月が妻たちである星（座）を順に訪れて宿泊し[28]，朔の日（夜と昼）には太陽女神 Sūryā のもとに滞在する（太陽との結婚）[29]と理解された。後には，朔の夜に月が（太陽ではなく）大地に宿るという説も生まれる[30]。また月の出没が毎日平均約50分ずつ太陽より遅れ，朔には太陽に追い着かれることから，太陽すなわち Indra が月（Vr̥tra を象徴する）を追いかけて飲み込むという説が成立する[31]。月の満ち欠けからは，月が神々の食物すなわち「不死をもたらす飲物（*amŕ̥ta-*）」ソーマ（→ 注17）である，あるいは月に蓄えられているソーマを神々が飲食するという解釈も生まれた[32]。さらに，死者の霊魂・気息が神々の食物である月（ないし月に貯蔵されるソーマ）と同一視され，新

妻のように，飛びながら，光り瞬いていた水の娘（*ā́pyā*），— 水から（*apó*），男児が立派に生まれたよね —，ウルヴァシーは自らの長い寿命を全うする」。Purūravas が（通例 *apsarás-* とされる）Urvaśī と共に暮らしていた時のことを回想し，自分たちの子 Āyu（アーリヤの人々の祖）への言及を差し挟むことばである。

27 筆者「古代インドの暦と『昴』（*kŕ̥ttikās*）」，『天空の神話 — 風と鳥と星』，篠田知和基編，2009，596－592（101－105）参照。

28 月（ソーマ王）が Prajāpati の娘である *nákṣatra-* たちを妻としたが，Rohiṇī（牡牛座 α）のみを寵愛した結果，疾病（［*rāja-*］*yákṣma-*；Zysk, Medicine in the Veda, 1985［rep.1996］，12－15 参照）に捉えられやせ衰えたこと，平等に順番に各 *nákṣatra-* に宿ることにより恢復したという神話が残る：MS^p II 2,7:21,4－14 ～ KS^p XI 3:147, 1－12 ～ TS^p II 3,5,1－3（Caland, Altindische Zauberei, Verh. der Koninkl. Akademie van Wetenschappen te Amsterdam［1908］，rep. 1976, Nr.120；Krick, Das Ritual der Feuergründung, 1982, 24および Anm.45 参照）。この神話の背景には妻訪い婚の風習が伺われる。

29 RV X 85, 1－6（「婚姻の歌」冒頭）は月と太陽の結婚，および地上で献供されたソーマを神々が飲むことにより月が再び満ち始めることを主題とし，新月祭の起源を示唆する（→ 注34）。

30 例えば，ŚB I 6,4,5.15（cf. II 4,4,20），VI 2,2,16（Prajāpati ＝月），XI 1,1,4。

31 例えば，RV X 55,5 ～ AV IX 10,9, ŚB I 6,4,18－20。更に RV X 85,18 ～ AV VII 81, 1（太陽と月とは追い駆け合う二人の子供）参照。

32 例えば，AV VII 81,6, AB VII 11, ŚB I 6,4,5.14－17, II 4,2,7, XI 1,4,4, BĀU VI 2,16～ChāndU V 10,4（二道説：→3.3.）。

月祭の前日には祖霊祭 Piṇḍapitṛyajña が行われる[33]。いずれにせよ，朔の日に植物の絞り汁ソーマ（ないしその代替物）を地上で献供し，神々ないし Indra がそれを飲むと，天上のソーマである月が再び太り出すとされる[34]。かくして月と大地の間を神々の食物であり「不死をもたらす飲物（*amṛ́ta-*）」であるソーマ，ないし，死者の霊魂・気息が行き来し，それに応じて月が満ち欠けするという理論が成立する[35]。

水たちは *amṛ́ta-* と同一視されるので，水の循環には太陽系統と月系統の理論が併存することになる。前者は *devayā́na-* として，後者は *pitṛyā́na-* として「二道説」（→ 3.3.）に融合する。

33　AV VII 81,5（月は死者の気息により自らを包む），KauṣU I 2（死者は月に行く;死者の気息により月は白半月に増大する;黒半月に死者を地上に送り返し再生させる）。月＝ソーマは *rétas-*「精液」を与え受胎させ子孫をもたらすと考えられた，例えば RV I 91,16ff., IX 83,3, IX 86,39, X 184,2（新月の女神 Sinīvālī と受胎），AV VII 81,3ff., TBᵐ II 7,4,1（Soma-Sava, ソーマは *retodhā́-*「（祭主に）精液を置き定めるもの」）～ MSᵖ I 6,8,9 : 103,19, ŚB II 4,4,18（朔の夜に，黒半月＝Mitra が白半月＝Varuṇa に精液を注ぐと月が再生），II 5,1,9（ソーマ＝ *rétas-*），JB I 17f.＝50 ～ KauśU I 2（満月から新月までの間，月＝ソーマが搾られ，男に精液が送り込まれ，受胎），BĀU I 5, 15（朔の夜，Prajāpati の16分の１が生物に入り込み，翌朝に誕生）。

34　RV X 85,4f.（→ 注29），MS I 6,9 : 101,55ff.（新月は神々の *sádas-*，即ち，ソーマ祭で祭官達がソーマを飲む小屋；満月は神々の *havirdhā́na-*，即ち，穀物祭・ソーマ祭の供物の材料を積んだ荷車），ŚB I 6,4,5－8.15（*sāṃnāyyá-*）。体系化されたシュラウタ祭式では新月祭の主要供物は満月祭と同様にパンケーキ *puroḍā́śa-* であり，特殊な新月祭では酸乳 *dádhi-* と生乳の混合 *sāṃnāyyá-* がソーマの代用として Indra に献じられる。RV 以来の月とソーマの同一視は，起源において新月祭にソーマが献供された可能性を示唆する。移住に伴い，ソーマ（麻黄）の入手が困難となり，ソーマが *sāṃnāyyá-* で代用され，更に，満月祭と同じ供物（パンケーキ *puroḍā́śa-*）に置きかえられたかと推測される。新月祭の献供と *sāṃnāyyá-* の問題に関しては，西村直子『放牧と敷き草刈り』，2006，p.43－45:3－1. 参照。さらに祖霊祭とソーマ献供との関係も注目される：RV X 14－18「死者の歌」等に見られる祖霊へのソーマ献供，祖霊への *somyá-* という呼称，祖霊祭における *sóma- pitṛ́mant-*（AV XVIII 4,72 等）への献供，「朔に月＝ソーマを祖霊に与える，ソーマは *pitṛdevatyà-* である」（ŚB II 4,2,12）。

35　例えば，RV X 85,1－6, AV VII 81,1－6, VIII 10,19f., ŚB I 6,4,15－18, II 4,4,18－20, JB I 17f.＝50, BĀU I 5,15, KauṣU I 2。

4.3. 水たちの属性と「信」*śraddhā́-*

4.3.1. 水たちは諸世界と生物の体内に遍在し，形態を変えながら常に流動しつつ，永遠に宇宙を循環しているが，その本質を変えず，消滅しない。この理解から，「不死」*amṛ̥ta-*，「不滅」*ákṣiti-*，「真実（真実在）」*satyá-* の観念が導かれる。前述のように（→ 2.），「信じる」ことは「真実である」と認識することに他ならない。「真実」であることが「信じること」の根拠である。「真実である水たちにより信を捕捉する」というPraṇīta儀礼のマントラは自然な発想である。「真実」と「信じること」は表裏一体であるという考え方から，「真実」である水たちと「信じること」*śraddhā́-* の等置が導かれたかと推測される（→ 3.1）。

4.3.2. 水たちは人の支配を越えて奔放不羈に流れ，災害を引き起こし，体内では病気をもたらす。夜も休まず，同方向に流れ，様々な音を立て，一定の場所では水平となる。このような特性から，次のような能力を持つとされる：常に目覚めていて，すべてに気づき[36]，相互に連絡を取り合い，協力して万物を監視する；邪悪な力から守護すると同時に，「信頼」を裏切る者を処罰し，「契約・誓い」を保証する。水たちを証人として誓う，契約するという慣習が古くから存在し（→ 5.4.），「水たち」と「信を置くこと」との等置を促進したと推測される。

5. 水たち（*ā́pas*，後には *udaká-*）の祭式，儀礼における他の役割に関しては別稿を期すが，要点のみを列挙する。

5.1. 浄化作用による聖別

水の最も日常的な働きは「汚れを洗い流す」作用である。水の浄化作用は祭式の様々な場面で聖別のために利用される。水を啜る，水に触れる，沐浴，(祭主，供物，犠牲獣，敷き草，焚き木，祭式用具などに）水を振りかける

---

36 例えば，RV I 83,1 *ā́paḥ ... vícetasaḥ*「あらゆる方向の事柄に気づく水たち」（堂山英次郎氏の教示による）。

(*prokṣaṇa-*)，洗うなどの行為が頻繁に行われる[37]。新月祭・満月祭（従ってすべてのシュラウタ祭式）の前日（Upavasatha）に祭主は，髪と鬚を除去して沐浴した後，聖索をかけ，２回水を啜り（または水に触れ），Āhavanīya 祭火に焚き木をくべ，Vrata「祭主としての責務」を行おうとしていることを宣誓する。ソーマ祭開始時の Apsudīkṣā「水における潔斎」と終了時の Avabhṛtha でも髪髭等を除去し沐浴するが（→ 6.1., 6.2.），単なる浄化に留まらず，死と再生（世俗的存在［家長］としての死と聖なる存在［祭主］としての誕生，ないし，聖なる存在としての死と世俗的存在としての再生）を象徴する。同様の意味で，ヴェーダ学習（梵行 Brahmacrya），苦行等の神聖な行為の開始前と終了後にも髪・鬚の除去を伴う沐浴が行われる[38]。祭官たちもまた沐浴により祭式にふさわしい者として生まれ変わるとされる（→ 6.3.）。

5.2. 葬礼の最後における参加者の沐浴は「不浄を洗い流す」と解される。葬礼および祖霊祭（家庭祭では Śrāddha，シュラウタ祭では新月祭前日の Piṇḍapitṛyajña と，Cāturmāsya の一つ Sākamedha 祭に伴う年に一度の Mahāpitṛyajña）において水を注ぐ儀礼[39]，特に死者の名を呼び水を与える儀礼（*udakakarmaṇ-*, *udakakriyā-*）[40] では，清めの水にとどまらず，宇宙を循環する「不死・不滅・真実」の水が，祖霊として天へ上昇し地上へ再生することを象徴する役割が大きいかと推測される。祖霊祭を意味する *śrāddha-* は *śraddhā́-*「信を置くこと」の派生語であるが，水に象徴される生命主体（死者の霊魂）の循環・再生と不滅・不死を「信じることに関する（儀礼）」と解釈される。

37　例えば，動物犠牲祭での水の用法に関し，後藤敏文「古代インドの祭式概観 — 形式・構成・原理 —」（総合人間叢書 Vol.3, 2008, 57－102）88－92（paśu 動物犠牲祭式次第など）参照。

38　筆者「髪と鬚」日本仏教学会年報 59（1994）＝「仏教における聖と俗」（1994）77－90 参照。

39　葬礼：Caland, Altindische Todten- und Bestattungsgebräuche, 1896 [rep.1991], 55f., 72 ff.；Śrāddha：Caland, Altindische Ahnencult, 1893, 33, 48, 59, 64；Piṇḍapitṛyajña：ĀpŚS I 8,10－12;9,14;10,4;10,14 等；Mahāpitṛyajña：ĀpŚS VIII 16,4; TB I 6,9,9f. 等参照。

40　Caland, Altindische Todten- und Bestattungsgebräuche, 76－79, Hillebrandt, Rituallitteratur, 1897, 89 参照。この意味で *udakaṃ*＋*dā/kṛ* が Mahābhārata, Rāmāyaṇa に多数見られる；Dasaratha-Jātaka（N.461, Ja-a IV 126）にはこの儀礼の痕跡が残る。

5.3. 監視（→注36）と守護・魔除け

新満月祭の前夜（Upavasatha）に酸乳（*dádhi-*）製造後，それを入れた容器を翌朝まで水達に見張らせる：*ā́po jāgr̥ta*「水達よ，君達は目覚めてあれ」MS^{m} I 1,3 : 2,11 (KS^{m}, KapS^{m} 等)[41]。本祭開始時の Praṇīta 儀礼を取り扱う MS^{p} IV 1,4 : 5,18−6,6 では *ā́po rakṣoghnī́*「水たちが毀損力を打ち砕くものである」と述べられる（→ 3.1.）。

5.4.「誓い，契約」の保証と処罰[42]

祭式に不可欠な「信」を捕捉するために，祭式開始時に水たちを Āhavanīya 火に導く Praṇīta 儀礼（→ 3.1.）もこのジャンルに属する。

誓い・呪詛・契約・贈与・縁組・裁判などに際し水を証人とする風習は古くから知られ，祭式のみならず日常生活に根付き，現代にまで残る[43]。水たちによる誓いの古い例としては，AV VII 83,2（Paipp. I 103,4）cd：

dā́mnodāmno rājann itó varuṇa muñca naḥ |

yád ā́po ághnyā íti váruṇéti yád ūcimá táto varuṇa muñca naḥ ||

(Varuṇa の管轄する）各々の条項から，王よ，これから，Varuṇa よ，我々を解き放て。もし「水たちよ，殺されることなきものたち（*aghnyā́-*）[44]よ」と，「Varuṇa よ」ともし我々が言ったならば，それ（その誓い）から Varuṇa よ，我々を解き放て。

動物犠牲祭の最後に心臓の焼き串を処理した後，唱えられるマントラはこの詩節のヴァリアントである[45]。

41　西村直子氏の資料による。

42　水の精が人間の男に裏切られ，仲間の水たちが復讐する中世ヨーロッパの伝説（Fouqué, Undine, 1811，その戯曲化 Giraudoux, Ondine, 1939）との関連が興味深い。

43　具体例と文献に関しては，後藤敏文「古代インドの祭式概観（→ 注37）91f.「祭式と水」参照。

44　「優れた（よく乳を出す）雌牛たち」を意味するが，水たちと等置される：AV IX 44,9（Paipp. XV 3,9）「水たちは *aghnyā́-* である」。Narten, “Vedisch *aghnyā-* und die Wasser”, AON, 1971, 120−134 ＝ Kl.Schr. 120−189, 特に 186−189 参照。

45　TS^{m} I 3,11,1 (f) ***dhā́mno-dhā́mno*** *rājann itó varuṇa no muñca.* ***yád ā́po ághniyā varuṇéti śapāmahe*** *táto varuṇa no muñca.*（Varuṇa の管轄する）各々の条項から，王よ，これから，Varuṇa よ，我々を解き放て。もし「水たちよ，殺される事なきもの達（→ 注44）よ，Varuṇa よ」と［言って］我々が誓うならば，それ（その誓い）から Varuṇa よ，我々を解き放て；MS I 2,18 : 28,5−7（*śápāmahai* Konj.）; KS III 8 : 27,1f. ; VS VI 22; ŚB III 8,5,10（*itó* の代わりに *táto*, *ā́po* の代わりに *āhúr*）; TB II 6,6,2（後半のみ）;

相手の手に水を注いで贈与する例は仏典に多数現れ，Bhārhut，Sāñcī 等のレリーフにも描かれている[46]。Pāli 仏典に残る例を幾つか挙げる：

(1) Magadha 王 Bimbisāra が世尊に Veḷuvana を寄進する：

Vinaya I 39,14－18（：Mahāvagga I 22,18）*atha kho rājā māgadho seniyo bimbisāro sovaṇṇamayaṃ bhiṅkāraṃ gahetvā bhagavato onojesi. etāhaṃ bhante Veḷuvanaṃ uyyānaṃ buddhapamukhassa bhikkusaṃghassa dammīti.*

そこで Magadha 王 Seniya Bimbisāra は黄金製の水差しをつかみ，世尊の［手を］洗わせた（手に水を注いだ），「この私は，御身よ，遊林 Veḷuvana を仏陀を先頭とする比丘の集団に与えます」と［言って］。

(2) Anāthapiṇḍika 長者が世尊に Jetavana を寄進する：

Jātaka-Aṭṭhavannanā I 93,10－15（Nidānakathā）*mahāseṭṭhi suvaṇṇabhiṃkāraṃ ādāya dasabalassa hatthe udakaṃ pātetvā imaṃ jetavanavihāram āgatānāgatasa cātuddisassa buddhapamukhassa saṃghassa dammīti adāsi.*

偉大な商人の長は黄金の水差しを取り，十の力を持つ（世尊）の手に水を注いで，「この Jetavana-vihāra を過去未来の，四方の，仏陀を先頭とする集団に私は与える」と［言って］与えた。

(3) Vessantara 王子（菩薩）が二児と妻をバラモンに布施する（Vessantara-Jātaka [N.547] Ja-a VI 547,8－10；570,4f., 9f.）：

Ja VI 570,4f.　*sīgham eva kamaṇḍalunā udakaṃ āharitvā udakaṃ hatthe pātetvā bhāriyaṃ brāhmaṇassa adāsi.*

［Vessantara は］急いで水容器により（から）水を取り出し，水を［バラモンの］手に注いで妻をバラモンに与えた。

ĀśŚS III 6,24（*ito* の代わりに *iha*）; ŚāṅŚS VIII 12,11；LāṭŚS V 4,6；MānŚS I 8,6,21；ĀpŚS VII 27,16；更に MS III 2,10:157,7（Pratīka, Sautrāmaṇī），MānŚS I 7,4,43（Cāturmāsya, Varuṇapraghāsa）等。Schwab, Das altindische Thieropfer（1886）161f.: Nr. 112 参照。

46 例えば，《祇園布施》Bhārhut 欄楯柱（B.C. 1 世紀）：遊林の中央で水差しを手にした Anāthapiṇḍika（Cunningham, The Stūpa of Bharhut, 1879 [2. Ed. 1962], 84－87 Jetavana Monestery, Plate LVII, Plate XXVIII）；階段蹴込み（ペシャワール美術館，A. D. 1 世紀末期，高田修「仏像の起源」図版17）：小さな水の壺を手にして世尊と向き合う Anāthapiṇḍika；《Vessantara–Jātaka》サーンチー第１塔北門裏面レリーフ：相手の掌に水を注いで二児と妻をバラモンに与える Vessantara 王子（Marshall–Foucher, Sāñchī, 1940, [2]1982, Plate XXIV），同様に白象と戦車を贈与（Plate XXIII）。

6．最後に，水たちの様々な属性を表現するリグヴェーダ中の讃歌を幾つか紹介する。

6.1. ソーマ祭開始時の「水における潔斎」(Apsudīkṣā) に用いられるマントラ：

RV X 17, 10[47] *ā́po asmā́n mātáraḥ śundhayantu* | *ghr̥téna no ghr̥tap$_u$vàḥ punantu* |
víśvaṃ hí riprám praváhanti devī́r | *úd íd ābhyaḥ śúcir ā́ pūtá emi* ||

母たちである水たちは，我々を浄化せよ。
溶かしバターにより，我々を，溶かしバターを清める者たちは清めよ。
あらゆる汚れを，天に属する女たち（女神たち）は運び去るから。
彼女たちのもとから，清く輝く者として，清められて，私はまさしくたち出でる。

6.2. RV I 23,16－22では河への献供と，ソーマ祭の終わりの沐浴 (Avabhr̥tha) が意図されていると考えられる[48]。第22詩節には「誓いの水」が言及される：

16 *ambáyo yant$_i$y ádhvabhir* | *jāmáyo adhvarīyatā́m* | *pr̥ñcatī́r mádhunā páyaḥ* ||
17 *amū́r yā́ úpa sū́r$_i$ye* | *yā́bhir vā sū́r$_i$yaḥ sahá* | *tā́ no hinvant$_u$v adhvarám* ||
18 *apó devī́r úpa hvaye* | *yátra gā́vaḥ píbanti naḥ* | *síndhubhyaḥ kárt$_u$vaṃ havíḥ* ||
19 *aps$_u$v àntár amŕ̥tam apsú bheṣajám* | *apā́m utá práśastaye* | *dévā bhávata vājínaḥ* ||
20 *apsú me sómo abravīd* | *antár víśvāni bheṣajā́* |
agníṃ ca viśváśambhuvam | *ā́paś ca viśvábheṣajīḥ* ||
21 *ā́paḥ pr̥ṇītá bheṣajáṃ* | *várūthaṃ tan$_u$vè máma* | *j$_i$yók ca sū́r$_i$yaṃ dr̥śé* ||
22 *idám āpaḥ prá vahata* | *yát kíṃ ca duritám máyi* |
yád vāhám abhidudróha | *yád vā śepá utā́nr̥tam* ||
23 *ā́po adyā́nv acāriṣaṃ* | *rásena sám agasmahi* |
páyasvān agna ā́ gahi | *tám mā sáṃ sr̥ja várcasā* ||

16 母さんたちが道たちを通って進む，祭式の行程に携わる者（祭官）たちの血縁者として，乳を蜜（ソーマ）と混ぜながら。

17 太陽のもとにいる，かなたの，あるいは，太陽がそれらと共にいる彼女たちは，

---

47 ～ AV VI 51,2 および YV-Mantra：MS I 2,1:10,1, III 6,2:61,7, KS II 1:8,10, TS I 2, 1(f), VS IV 2, ŚB III 1,2,11, ĀpŚrSū X 6,1 等。

48 先行する15詩節は諸々の神々をソーマ祭へ招く讃歌である。

我々の祭式の行程を駆り立てよ。

18 天に属する（女神である）水たちを私は呼び寄せる，我々の牛たちが飲んでいる場所へと。河たちのために，供物が作られるべきである。

19 水たちの中に不死が［ある］，水たち［の中］に薬がある。そして，水たちの賞讃のために，神々よ，君たちは競走の勝利者となれ。

20 水たちの中に，— ソーマは私に言った —，あらゆる薬［があること］を，そして，あらゆるものに幸となる火［があること］を。そして水たちは，あらゆる薬を持つものである。

21 水たちよ，薬を満たせ，私の身体のために防御として，そして，永きにわたって太陽を見る（長生きする）ために。

22 これを，水たちよ，運び去れ，何であれ私の中に困難（進み難きこと）が［あれば］，あるいは，私が欺いたことがあれば，あるいは，また，偽りを誓ったことがあれば。

23 水たちよ，［君たち］に従って，今日，私は行動した。［君たちの］精髄と，我々は合体した。乳を持つ者として，アグニよ，来い。かくて私を，(祭官としての)効力と結びつけよ。

24 略。20－23 ＝ X 9,6－9（→ 6.3.）。

6.3. 4篇のアーパス讃歌の中，代表的なX9：

1 *ā́po hí ṣṭhā́ mayobhúvas* | *tā́ na ūrjé dadhātana* | *mahé ráṇāya cákṣase* ||

2 *yó vaḥ śivátamo rásas* | *tásya bhājayatehá naḥ* | *uśatī́r iva mātáraḥ* ||

3 *tásmā áraṃ gamāma vo* | *yásya kṣáyāya jínvatha* | *ā́po janáyathā ca naḥ* ||

4 *śám no devī́r abhíṣṭaya* | *ā́po bhavantu pītáye* | *śáṃ yór abhí sravantu naḥ* ||

5 *ī́śānā vā́riyāṇaāṃ* | *kṣáyantīṣ cárṣaṇīnaā́m* | *apó yācāmi bheṣajám* ||

6－9.（讃歌の終わりまで）＝ I 23,20－23（→ 6.2.）

1 水たちよ，君たちは，実に，強壮をもたらす者たちである。だから，我々を活力の中に置き定めよ，大きな興奮を目にするために。

2 君たちの最も吉祥なる精髄であるもの，それに我々を，ここにおいて，与らせよ，（そのことを）欲している母たちのように（母たちとして）。

3 彼のために，我々は君たちの意に添おう，その者の定住のために君たちが[我々を］活気づけ，また，水たちよ，君たちが我々を生み創る［彼のために］。

4　幸多く，天に属する（女神たちである）水たちは，我々への援助へと現れ出でよ，飲むために。幸多く，寿多く，我々へと向かって流れよ。

5　好ましい物事を意のままにする，諸々の境界を支配している水たちに，私は薬を乞う。

6－9＝I 23, 20－23（→ 6.2.）

第3詩節の「我々を生み創る」は，祭主である部族長のために，祭官たちが沐浴し，生まれ変わることを表すと思われる（→ 5.1.）。個々の詩節は後の祭式において様々に用いられる。例えば1－3（一部8も）は，動物犠牲祭において大網膜の献供後に，天界の出入り口を象徴するCātvāla（祭場東北に位置する土を取った後の窪み）で祭主と祭官一同が行う洗い清めの際のマントラ5詩節に含まれる[49]。

49　ĀpŚS VII 21,6。

ā́pas 'the waters' and *śraddhā́-* 'trust, belief'

Junko Sakamoto-Goto

In the ancient India, *śraddhā́-* 'placing trust ; trust, belief, faith' was often symbolized by *ā́pas* (nom. pl. fem. of *áp-*) 'the (living) waters' and even equated with them.

The equation of *śraddhā́-* 'trust, belief' with 'waters' appears in the prose of the Black-Yajurveda-Saṁhitās explaining the Praṇīta rite, i. e. the leading of the waters to the east (to the Āhavanīya fire) in order to grasp *śraddhā́-* in the beginning of the new-moon and full-moon sacrifices : MS I 4,10 : 59,2–6 ~ KS XXXII 7:26,12–16 ; MS IV 1,4:5,18–6,6 ~ TS I 6,8,1–2 ~ TB III 2,4,1–3, cf. TB[m] III 7,4. Such equation underlies also "the doctrine of the five fires" (*pañcāgnividyā-*) in the Chāndogya-Upniṣad V 3,1-10,1 and the Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad VI 2,1–16. On the other hand, the Kauśītaki-Brāhamaṇa VII 4 teaches that "the imperishability of the effect of an only once performed sacrifice" (*sakṛdiṣṭasya akṣiti-*) is guaranteed by *śraddhā-*, which is explained as "the imperishability of the waters in the outer worlds and in the body of the sacrificer".

The old Indo-Aryan language distinguished two types of 'water' : (1) 'water as material' expressed by neuter substantives *udán-*, *udaká-* and *vā́r-* (later *vāri-*); (2) 'living waters' with mind, regarded as feminine divine beings and expressed by a female substantive *áp-* (usually in the plural, nom. *ā́pas*).

In the Vedic period, it was already recognized that the living waters circulate in the worlds and in the living things. They, however, neither change their nature, nor disappear, in consequence symbolize the 'immortality' *amṛ́ta-*, the 'imperishability' *ákṣiti-* and the 'real existence, truth' *satyá-*. The waters awake day and night and watch everything in order to guarantee the vow and to punish those who have broken it. The equation of *śraddhā́-* 'trust, belief' with the waters seems to have originated from the observation of those characters of the living waters.